

ウォーキングカンファレンスを導入して

—現状から見える有用性と改善点—

The merits and demerits of Walking Conference

宮下 典子¹⁾ 守屋 綾子¹⁾ 草間 美穂¹⁾ 細田 かず子¹⁾ 松澤 有夏²⁾

1) 信州大学医学部附属病院 西5階病棟 2) 信州大学医学部保健学科 看護学専攻

Key words ウォーキングカンファレンス メリット・デメリット

<要旨>

B病棟でウォーキングカンファレンス（以下、WCF）を行った結果、WCFは教育的効果・点滴業務での安全性向上・超過勤務の削減に有用であることがわかった。

しかし一方で、さらに効率的なWCFを行うためには、WCFにおける記録や方法などその運用方法を統一することが必要であることが明らかとなった。

さらに、フリー看護師の確保など看護体制を整え、看護師の経験年数による業務の差が縮小できるような業務内容明文化とリーダー看護師業務の見直しが今後の課題である。

I はじめに

現在、多くの医療機関ではベッドサイドケアの充実を図るなどの目的から¹⁾、机上での看護師間の申し送りを廃止・改め、WCFが行われるようになってきている。そして、患者からのインフォームド・コンセントが得られやすくなる、患者の闘病意欲が高まる、病気への前向きな取り組みが見られ²⁾と言った患者参加型の診療効果が挙げられている。

さらに三宅らは、WCFの効果として①先輩看護師が行う患者対応が後輩の役割モデルになる②事故を回避するという安全対策の効果が得られること³⁾を挙げている。

平成18年度診療報酬改定において7:1看護体制が敷かれ、A病院では平成20年度よりこの体制が敷かれることになった。これに伴い大幅な看護師の増員が見込まれ、新人看護師およびローター看護師が効率よく安全に業務を習得できるような教育体制が必要不可欠となっている。

このような背景の中、A病院の消化器外科・移植外科病棟であるB病棟は、術直後の急性期患者および移植患者の看護を担い、多量の点滴やドレーンなどのルート管理、循環管理など高度な知識・

技術が要求される病棟である。こうしたB病棟特有の業務内容を既在の看護師と新たな看護師が共有し、安全で質の高い看護を提供すること、またベッドサイド記録の実現による業務の効率化、点滴業務の安全性向上などを目的として2007年9月からWCFを導入した。

そこで、今回B病棟でWCFを実施した中での有用性を再検討し、より良いWCFを行う上での改善点を明確にする目的で本研究に取り組んだ。その結果、WCFを行う上での新たな課題が明確になったのでここに報告する。

II 用語の定義

・ウォーキングカンファレンス

二人の看護師がペアになって行うもの。

パソコンや点滴を持参し、ベッドサイドで検温・観察・点滴投与、経過表入力・点滴実施入力・看護目標の評価、修正などの記録および、ADLの介助を行う。

III 研究方法

1. 研究対象

研究について、書面での同意書を用いて説明を行い、同意を得られたB病棟の看護師、計20名。

2. 研究調査期間

2007年12月 (実質調査日数10日間)

3. 調査方法

半構成的面接

面接での面接者はB病棟の看護師である。面接者と対象者に面識があるため、面接者と対象者の関係により回答内容に制限が生じることが危惧されたが、WCFを互いに経験していることでより深い意見が収集できると考え、あえて面接者を他病棟のスタッフに依頼はしなかった。

4. 調査項目

- 1) WCFのメリット
- 2) WCFのデメリット
- 3) デメリットに対する改善点

5. 分析方法

KJ法

IV 倫理的配慮

- 1) 事前に文書で研究の必要性を説明し、同意書で参加協力を確認できた対象者のみに調査を実施した。
- 2) 調査への参加や中断など自由意志を尊重し、どのような場合でも業務上の不利益がないことを提示した。
- 3) 回答内容は調査者が書き留め、回答者が特定できないようにした。

V 結果

調査のメモより、WCFのメリットとデメリットの表現されている部分をKJ法で抽出した結果、20名の氏からメリット計146枚、デメリット計106枚のラベルが作成された。ラベルを広げて集め、表札作りをした結果、メリット16項目、デメリット23項目の小表札を抽出した。

1) メリットの結果

パソコンを持参するメリットとして、【点滴のオーダー確認・ダブルチェックによる安全性の向上につながる】【情報収集や記録がタイムリーに入力できることによる超過勤務の削減ができる】【ベッドサイド記録による患者を主体とした観察・看護目標の評価の入力ができる】の3点を中表札にグループ化した。

ペアでのラウンドすることによるメリットとしては、【ともに観察し、小カンファレンスで看護目標の評価修正ができることによる看護記録の充実】【後輩の立場からは能動的・受容的観点から教育の場になり、先輩の立場からは指導の場になる】【ペアで行動することによる清潔77の効率化がされる】の3点を中表札にグループ化した。

グループ化できなかったものは、【患者と情報を共有し計画が立案・評価ができることで患者のニーズに応じたケアの提供ができること】【業務の効率化と安全性の向上による精神的負担の軽減ができること】の2点の中表札であった。

2) デメリットの結果

デメリットでは、看護体制の不備やマンパワー不足として【コールの頻度でWCFが中断され、

患者の重症度でWCFが成立しなくなる】【フリー業務を行う看護師の経験年数やスタッフの協力体制によって、業務に差が出る】の2点を中表札にグループ化した。

WCFによる看護師の心理面として【リーダー看護師が受け持ち患者を持ち、自分のペースで動けないことによる、精神的負担増大】【指導の時間的余裕がなく、指導まで至らない】【WCFは自分のペースで動けず、焦りや依存が生じる】の3点を中表札にグループ化した。

グループ化できなかったものは、【点滴のダブルチェック方法・入力範囲、看護記録の入力内容、ケアの方法が統一されていない】【パソコンのフリーズや夜勤者との記録時間の重複による、記録の障害】【ペアでのラウンドは、患者へ圧迫感を与えラバシの配慮に欠ける】【パソコン入力に集中し、患者からの情報収集ができない】【WCFに慣れず、時間が有効に使えない】の5点の中表札であった。

VI 考察

1) WCFのメリット

パソコンを持参したペアでのラウンドは、点滴のダブルチェックやオーダー確認ができることが安全性の向上につながり、またケアの効率化も図れる。これは、看護師の精神的負担の緩和にもつながると言える。三宅らの研究では、事故を回避するという安全対策の効果のみ明らかとされていたが、本研究の結果WCFは安全性の向上に伴う効率化や精神的負担の軽減も明らかとなった。これは、新たなWCFの有用性が拡大できたと言える。

ベッドサイド記録によるタイムリーな記録・目標の評価およびペアでのラウンドによる業務の効率化が図れることによって超過勤務の削減につながると言える。

パソコンを持参しベッドサイド記録ができることよってタイムリーな記録ができ、さらにペアでラウンドをすることによって小カンファレンスも実施され目標の評価ができるため看護記録が充実する。これは、患者を含めた情報共有ができることで患者のニーズに応じたケアの提供につながる。こうした患者とのかかわり方を直に見ることで、コミュニケーションのとり方や観察の視点を学ぶ機会となり、教育的な効果を生むと考える。ここでは、三宅らの先輩看護師が行う患者対応が後輩の役割モデルになるという結果と同様な見解を得た。

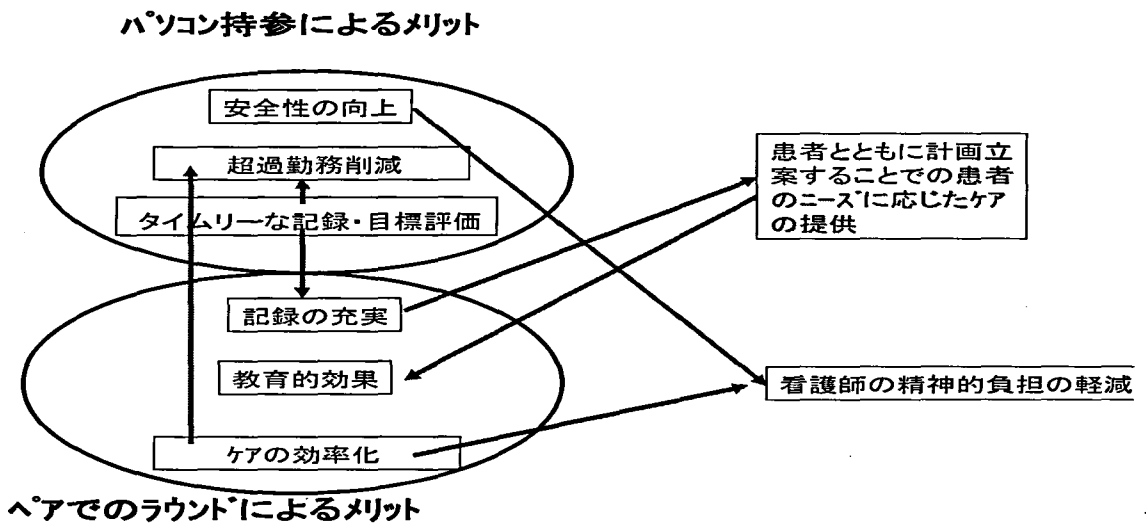


図1 WCFのメリット 関連図

2) WCFのデメリット

WCFでの記録方法やケアの方法が統一されていないことで、指導する時間が不足したり、WCFは早くラウンドをしなければならないという考えから焦りや相手への依存を生じていると考える。また、WCFの実施回数が少ないことや中断によって、WCFに慣れず時間が有効に使えていないことが考えられる。さらに、WCFに慣れないことで、パソコンへの記録の入力に集中し、患者からの情報収集が不足することが考えられる。

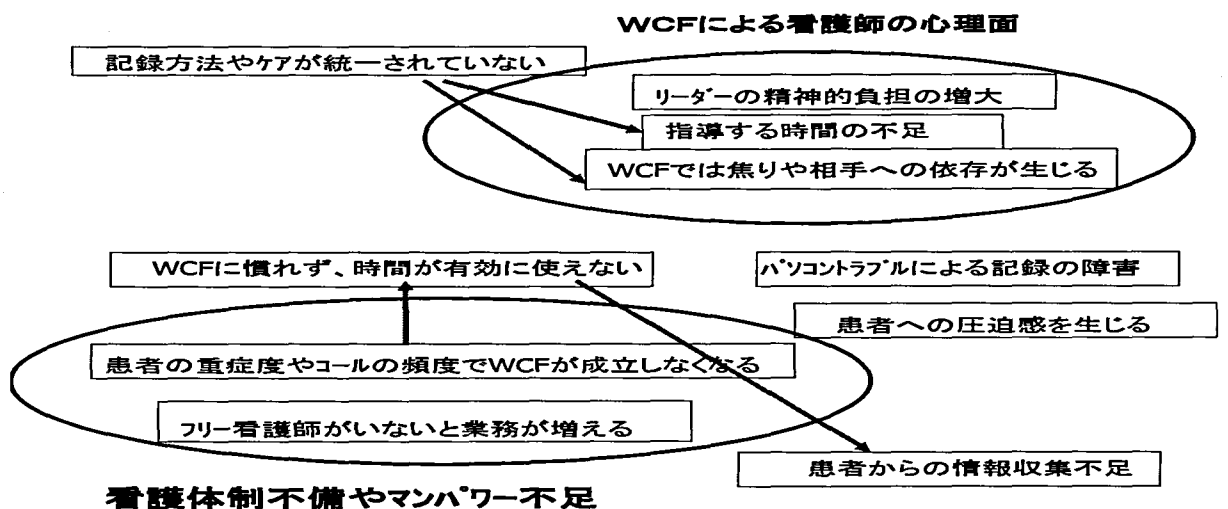


図2 WCFデメリット 関連図

3) WCFの課題

以上のことから、今後もWCFを継続する中で、記録やケアの方法などその運用方法を統一することが必要であることがわかった。またフリー看護師の確保など看護体制を整え、経験年数による業務の差が縮小できるような業務内容の明文化とリーダー看護師業務の見直しが課題であると考えられる。

教育的観点では、後輩からはメリットの意見が多く、リーダーの立場からはデメリットの意見が多く見られた。このことから、リーダーはWCFで後輩を指導をしている自覚がないにもかかわらず、後輩はWCFを教育の場と捉えている。つまり、ペアでラウンドをすること自体が教育の場になっていると考えられる。そこで、後輩から出た肯定的意見をリーダーへ還元し、WCFの教育的メリットを広げていく必要があることがわかった。

Ⅶ 結論

1. WCFは、教育的効果・点滴業務での安全性向上・超過勤務の削減に有用である。
2. WCFの今後の改善点は、WCFの運用方法・フリー看護師配置のための看護体制であり、フリーおよびリーダー業務の明文化も必要である。

Ⅷ 謝辞

本研究を行うにあたり丁寧なご指導いただきました、信州大学医学部保健学科 看護学専攻の松澤有夏先生に感謝申し上げます。

<引用文献>

- 1) 岡ユカ：ラウンドを取り入れた申し送りの効果—申し送り改善調査より—、第37回日本看護学会論文集 看護総合、p254
- 2) 斎藤亮子・諸田直実・竹村華織・初谷留里子・荒井千佳子：ウォーキングカンファレンスの構成要素およびその型と特徴、Quality Nursing、7(6)、p47、2001
- 3) 三宅知子・伊集院則子：ウォーキングカンファレンスを導入して—教育と事故防止の観点より—、第34回日本看護学会論文集 看護管理、p160-162、2003